



中村俊定文庫
文庫 18
45
2



毛吹草追加下

一夏之發る

卯月日

袖垣や卯花がさね志らむる

卯花乃陰よけ子れまおけらと

雲中乃竹子う卯の花は陰

餘花あはれ一樹乃陰を穰集か

杜あかんやころのまめ男

花垣と上檀あ〜花の王

むらさきやび目よえかゝる袂か

梅乃下れ菖蒲う花のむら田

灌佛の目ぬかりけまハ



日暮し神事成

廿日
七乃社まの所や申せし時

如る後養命

非うけて契あきてゆるらうら

にばやとらるは海る郭么

村あやこも事あつて

お考そむるあつて

きらろもや花の雲を母さ

織敷屋こそ

群乃あやと海やあつ特田あ

るらう記の群の垣は教么

白ひあつあまや沈乃槽と記を

廿日
たのがきハ茶磨流あり海鳥

如る後足掛し神事成

廿日
飛ハ物乃羽らるの駒うき洞

城をまかこむやあやあ

すづらんあやあおろも流

廿日
先いよとあはら一よの策ちま

競るよ海うら

廿日
操あで入るや競馬あの上り

如る後若れ言や木あ郭么

濃茶うをまかこむられあ

夢乃能やいとくおもも脇置魂

大佛殿近き所まで

わくきつた夢も伽藍の指し

石川や稚ぐり口も館の奥

う乳草に志野のよもまらで

蚊ぼらんとた合らふとけ

葉の蟹実や人乃る葉いち

葉茂す胡蝶や花と其根梅

去法方より庭よき月下

のよとむきよしてはあら

御庭より月園かあつじ

強敵う法がむむなそんの花乃を

ひかむめやうら下野の花たや

咲海とみ花や掛書敷性ま

多や若るはらぢの若れむの所

姫百合乃そむやおかのか草

鬼言合しなれつうかいふ海

夜菊に垂おたるまやぬの月

思冬酒やひやそれも金銀花

冬や白草う夜りあきうた糸落

岸友乃わのやけまは瓶の水

武研に戸徳元亭あき

夕月ぬく長き露せむらたぬれあ
夢みはらおきて乃田まの肌
あやうき屋百日紅をまきの花
常盤木のはる葉と

とくはまてはる常盤の木情山
夏乃木此下りや目おどち
氷室の酒を

夏乃又拵て清調の書餅
お江戸元綱亭

あかむしは扇乃月井垣家
月うも引あやめん下清と

お江戸玄札未得三吟よ
寒茶う夏とけ野ふこ水
只ひらに木れ長のはやぬぞ
志ねと来る盗人や瓜のまら

祇園と云

あつる目と津乃教や七車
あつらるとあつらうし花の又
あつらや各もひかぬ花の志
浪うけて花もとり菱の眺外
先や於糸とあはけら蓮花鏡
夕白乃花や小娘の恥づくし

こが螢月の威光は新しき

祇堂を塔とて築き

けうせなや松笠峰の花乃帯

晴きつらふけう金扇を蚊帳の肌

流河改草めく

月影や糟飼の魚となき母

谷上のやどりよそ

魚あつて人よるまは細代が

お坂よりして

仲おまきし袖にむきとて忘唐水

蟬のよむおちよよ急あつた井

夕風や蟬廿母あ乃雨さじ

去法方よそ連音一の法云

あこまほなほはあなま

位よはあごあや野の市乃池

飛雲園とてむちものぐわくら井

城のが火の文字と墨字の螢の肌

友は乃堂を冬を火揃うか

後半のくはらむ

雲うしむ細言川やさくお帯

お給はまらる人乃はらむ

本ノ教乃堂ハ貝ハお給はらぬ

六条道場金相ある

乃蓬入道場や麻の中

巳の所乃日新う園う一終なる

大永後よりく

十市よあも夕山いちめがら市女登

右う醫所う陰暑ううぬ後川

右八十九句

傾このよう廻文之誹諧として人乃いひ

流げらうう成るるふ一まら

魚いさなある物こそある古よとあ

魚鳥いさなとり湖沼うみ湖沼うみけりは

事あるまゝあれどから教百教

あつちあつちいひいひいひいひ

人乃きききききききききき

きききききききききききき

あつちあつちいひいひいひいひ

あつちあつちいひいひいひいひ

の乃いひあつちあつちいひいひいひ

一たけまじり言の兼施と結
むぬ方乃多うりあふ又分入
ゆう一うなる風乃まらゆ
らん草むあつらひとむる侍ら
そ一曲のあつてありてやぐ
けりもさむね南からうとあそ
いでや流きよと思ふあし
あそ程の事とせは忘れり
て身は他とす罪あへせざ
ものづらうとて誰何のなきよ
まうんや昔とあゆみ大和おも

限りに唐詩よと題文の例
多一対よ若蘭錦字詩を
二百首を借りてまの方へはる
りけいふ是もをばるる御あ
あつらふ思ひあまも
そいふおろまけのまらと
をうらふ人実人の詞乃
花むらむれとあつていふ
猶も入るうとあつていふ
ふれむらむらあつていふ
や人の潮海とあつていふ

廻文乃しひんしひの具頭ツリカ有のあり
よなほめいせりともはるるに
そ〜ひんしひのよとより漢あざ手根
き〜を笑わら格かくたる〜 凡おほ
廻文百韻乃極を思ふよとらよ
ふ〜の良りや杖せうよめいめて思おもふを
き〜まばむ教しやうと〜とつ侍しやく
ひはまぶ昔むかし由よしは乃極なほきた
あ〜す神かみ新あらた月つきはか入いなる死し
よもあ〜むと〜とあ〜はよ
は〜なむと〜とあ〜はよお

まは〜めあむと〜と殺ころるを賤せ
乃よふ〜と〜のり其次ついで〜と
〜りぬ〜と松まつ後ごとも書かけ
竹たけ家やな〜

交野まの入いつとと〜と〜と主しゆに
と〜と〜のあも瓶びんの蒲かき萄たうのま
繩ひも垣かきのかき〜と〜と〜と
あ〜の〜と〜と〜と〜と
た〜の〜と〜と〜と〜と
く〜と〜と〜と〜と
か〜と〜と〜と〜と

人へのまがらふとゆるしんま
のそそくましつるあそび

正保二年九月六日

廻文

春日何

重光

交野の身と小名をまつと此後
冷乃氣さむく砂酒の破 重方
照くまの西よまは月たり 重貞
友なる人回手懐かき 重供
瓜琴をひいてむん男松 方
巢ひくうりきこ作う考 頼
日の南ちやよま由南廿日 供
海より川あはま乃物母 貞

比もたよ下あふんて一舞の
 比は花の蓮をいむ蓮
 ひろのこまきおりの
 くるが髪さうやるるるる
 可んたひはあよほあひき
 比さなり記申さるる記あろ
 狐よまひ何れもごん今つき
 いるやましを袖原やま
 祓も人よあ今いさ清も
 志ろおとさる月あし
 池乃おやさや清の京

札 方 供 貞 札 方 供 貞 札 方 供 貞 札 方 供 貞 札 方 供 貞

美よのころみ花つるを
 本乃本社のびまま日の軒の素
 夜よんぞよ何角はは
 君代もま建能くも野の三
 友乃あつるあさる月の
 席がせあまの田中を
 志ろおつるやるるるる
 村もや勝とま思やめざん
 寸れたとほけあなけ新
 流そあ初流さるるま
 海ありてあ

貞 方 供 貞 札 方 供 貞 札 方 供 貞 札 方 供 貞 札 方 供 貞

恙よきうらぎの記きまの記きま
 清く久くとも先書あるあつ
 ちと難と行あるわいし女たち
 見うけさたれたてしむぎいよげ
 嘆よお馬をぬんまん急おま
 名の理のな花をぬん小冊のむ
 月と強織をさうくきまをさ
 びのきあきまをさの
 うづきと腹くら腹ははきう
 菜もりすむんまうりまをさ
 との皆へのや葛蒲の花を酒

貞 供 方 貞 供 方 貞 供 方 貞 供 方 貞 供 方

出ーままでとより甲あまの
 敵ハハより名よりき首は林
 埒ぞおそり
 奇もく書東番ハ字よく
 弓も矢もか入の弓も書か
 目ぞあまの書案か門のお極ひ
 きまのつらひや屋よままふ
 中も縄歯糸で目出し花が
 屋ろ魚や社よりや
 まるのとう恒根の福を祿の強
 ま砂よ風が風がよこせ海

三
 方 貞 供 方 貞 供 方 貞 供 方 貞 供 方 貞 供 方

言やあふ波あふはるあふ形
 むくまのまきまきとらん
 なる居一の木のや推が本
 月おしおし四ノ一人おしおしま
 紫あざ花はなのうら芳よしもくもくあきあき宿しゆく花はな橋はし
 糸いとをくをくあつあつまはまはふふ苦く花はなはは
 續つづ志しづづ一いちききああききささ志しづづああきき
 如ごともも芳よしううああくくまま後ごののむむ
 若わかもも来きるる薰かほ物ものもも亦また焼やくく尺しゃくもも尺しゃくもも
 かりかりああくく後ごよりよりききうう
 下した紐ひもととりりとと糸いととと思おもつつがが

方 於 供 貞 方 供 貞 方 供 貞 方 供 貞 方

梅うめささくくななりりととりりああぐぐささああん
 此こ子こ粒つぶととりりくく穀あわいのの子こ
 又またうちうちああるるああるるああららまま
 昔むかしああのの筒つつ鉄てつ炮ぱうのの筒つつたためめ
 ちちとと隆たかけけははるるうう猪ぶ湯たうののじじ
 田いのの月つきりり穀あわいのの日ひ穀あわいののああるる
 川か上かみののままささくくははとと河かのの
 志しららぬぬ人ひと天あまををののままはは同どうぬぬ
 ぬぬりり笠かさううるるくく黒くろ笠かさかかりりぬぬ
 寺てらなるるとと照てん日にっ書しよでで扱あつかるるでで
 強つよ治ぢよよんんくく清せいじじののまま

方 貞 供 方 於 供 貞 方 供 貞 方 供 貞 方

うらむひ水花うつこは教申
 まゆしし庭は白雲
 去来六百もの世も春時
 舞蝶と舞はるはと蝶
 名生垣はよみとて秋景
 草むらよ又適は茶喉
 皆見えにたつる夜を如苗
 月野うらふゆらう塩牙
 石子に母あけらるる
 川に水多と流る
 む作田ええあん苗は竹田

教 供 貞 教 供 方 貞 供 方 貞 教

丹毛のまらうらうら
 齋堂をせとておきまらる
 伊福海まらうら
 力成出たおまぞ下を切
 大六六つはばまてと板
 よくまら豊のこよか
 浦くを言はまれ小車
 名へのうらあらんお志
 氣れらうらうら
 きら又垣うらうら
 威勢このこり神乃は

教 方 貞 教 方 世 教 貞 教 方 貞 教

人ひつつかせバ務競馬馳 供
川くろ志りが空衣白川 方
あよる堤つこよえつ波よる 札
芝作根くちく 貞

重頼 廿又
重方 廿又
重貞 廿又
重供 廿又

正保三年二月中旬

廻文

南何

直友

樂らまでそ花戸て皆ハ神廟う
あ乃才つるは去月のものと 重頼
此水みをハ屋ぐをゆ宿るのて 重方
吾わとくくととくくととと 貞
亦なりまつう切りえき如く本ま壇た 札
山がのさ舞いも持は栄か通まを 日
むら馬ま子このら如く於まのらん 方
水みをまより記はききすそ波 日

照らす月夜の輝乃まらう遊て 月
 むのきまらう一はしきものむ 報
 照らすもき花のまらう高の道 日
 けらるるもれやあまきあまの 方
 みるめあまのまらうあまの 報
 とけあまのまらうあまの 日
 世あまのまらうあまの 方
 形えんをまらうあまの 日
 ひとあまのまらうあまの 報
 かのあまのまらうあまの 日
 ねらう一民のまらうあまの 方

信海よりまらう 日
 牛とあまの車丸く花えん 報
 枕はくよの枕あまの 日
 友のまらうあまのまらうあまの 方
 鴨り小鴨あまのまらうあまの 日
 皆花あまのまらうあまの 報
 子とあまのあまのまらうあまの 日
 葉あまのまらうあまのまらうあまの 方
 志らくて花あまのまらうあまの 日
 御あまのまらうあまのまらうあまの 報
 う残やんあまのまらうあまの 日

名なき花と傳つらむとては日
 聲^{こゝろ}がひびくもなむとては日
 夕^{ゆふ}かたもたれあはれなむとては日
 詠^いのまよふとてはなむとては日
 とおのめりまふ春の籠^{かご}の酒
 梅^{うめ}とて花のまふとては日
 海^{うみ}とて考ひつらむとては日
 子^こ親^{おや}れなむとては日
 出^でていきりもなむとては日
 夢^{ゆめ}のまよふとてはなむとては日
 眠^ねのまよふとてはなむとては日
 報^{ほう}

春^{はる}のちがひもなむとては日
 藤^{ふじ}ののめりまふとては日
 鶴^{つる}のまよふとてはなむとては日
 ものまよふとてはなむとては日
 花^{はな}のまよふとてはなむとては日
 世^よのまよふとてはなむとては日
 歌^{うた}のまよふとてはなむとては日
 夕^{ゆふ}のまよふとてはなむとては日
 井^いのまよふとてはなむとては日
 春^{はる}のまよふとてはなむとては日
 報^{ほう}

能相模

能

兄弟

徑

雪芥

風象明而水忘南

町瀕恒若枕浦

解申商

町彈

日穴循張

馬旗笠炎子目

神事

宗音

親子

四座

蕪

南

乾

店

簇

平

推柳

汁脰

芝原淺茅花葉

蕪荻薄女郎花

搦虫蚤雄子胡蝶

雪霜露

菱花蓮道車力法

作舟場

芝居信筒棧

札吉鼓

西川筆原

標

川廉

聖道

聖道

聖道

聖道

聖道

聖道

聖道

聖道

聖道

簾すだれ 桓つら 玉たま あり 窓まど 廊りやう 軒のき 之
柳やなぎ 腕うで 木き 菖蒲あやめ 鶯うす
紫蟹むらさきがま

短文之狂歌十首

春

志こころ 香かほ 乃すなは 其その 由よし 乃すなは 其その 去い 那な 乃すなは 其その 馬うま 志こころ
馬うま 子こ 乃すなは 其その 去い 那な 乃すなは 其その 馬うま 志こころ
乃すなは 其その 去い 那な 乃すなは 其その 馬うま 志こころ
乃すなは 其その 去い 那な 乃すなは 其その 馬うま 志こころ

夏

田いり 乃すなは 其その 去い 那な 乃すなは 其その 馬うま 志こころ
乃すなは 其その 去い 那な 乃すなは 其その 馬うま 志こころ
乃すなは 其その 去い 那な 乃すなは 其その 馬うま 志こころ
乃すなは 其その 去い 那な 乃すなは 其その 馬うま 志こころ

秋

あゝ萩^{はぎ}のよに^久南^な候^{さく}名^なの志^しし
花^{はな}を^をむ^むに^にの^の氣^きに^にし^し重^し貞^し

冬

月^{つき}は^はと^と清^{きよ}と^とい^いふ^ふは^はあ^あ乃^の
夕^{ゆふ}を^をら^らと^とい^いふ^ふは^はあ^あ乃^の

恋

そ^その^のい^いは^はら^らと^とい^いふ^ふは^はあ^あ乃^の
昔^{むかし}が^がは^はい^いさ^さる^るや^やと^とい^いふ^ふは^はあ^あ乃^の妹^{いもうと} 重^し貞^し

君^{きみ}乃^のい^いは^はら^らと^とい^いふ^ふは^はあ^あ乃^の
と^とく^くあ^あら^らよ^よ人^{ひと}目^め移^{うつ}り^り未^まだ
清^{きよ}き^きな^なり^りと^とい^いふ^ふは^はあ^あ乃^の弟^{あに}未^まだ
使^{つか}ま^まの^のあ^あら^らと^とい^いふ^ふは^はあ^あ乃^の日^ひ

雑

池^{いけ}の^のい^いは^はら^らと^とい^いふ^ふは^はあ^あ乃^の
お^おの^のい^いは^はら^らと^とい^いふ^ふは^はあ^あ乃^の重^し貞^し

神祇

冬^{ふゆ}の^のい^いは^はら^らと^とい^いふ^ふは^はあ^あ乃^の
あ^あら^らと^とい^いふ^ふは^はあ^あ乃^の未^まだ

廻文之題秋

春

時より記とくをひきひき唱て来ふ
 きたこのなき庭を庭より花初むる
 ひあふめん 笑りやなき 春もまよ
 のびる春は 海をよや 咲くあまの
 市より草 朝の枝をよとあくハ
 花の記をよ 時よりと 春のよひ
 てよまふく 垣角たが 宿りよ
 足すよの春 晴つまよ 山やかよ
 つけ 花の記 白くわじ 波もまよ

よせよをよ 庭よとそ 春のよひが
 春のよひ 春のよひ 春のよひ
 春のよひ 春のよひ 春のよひ
 春のよひ 春のよひ 春のよひ
 春のよひ 春のよひ 春のよひ

秋

秋のよひ 秋のよひ 秋のよひ
 秋のよひ 秋のよひ 秋のよひ
 秋のよひ 秋のよひ 秋のよひ
 秋のよひ 秋のよひ 秋のよひ
 秋のよひ 秋のよひ 秋のよひ

まよき者 少ておて 支ゆは 遊あそび
西あまひがに 氷こほりひが 鴨かひるが
鴨あま秋あきゆ 御みとま 鴨かひるが
鴨あま秋あきゆ 御みとま 鴨かひるが

遊

人張ひととひ よる 鴨かひるが
たちありきと 鴨かひるが 神かみぞ 鴨かひるが
たちありきと 鴨かひるが 神かみぞ 鴨かひるが
たちありきと 鴨かひるが 神かみぞ 鴨かひるが
たちありきと 鴨かひるが 神かみぞ 鴨かひるが

昔正保四丁亥仲春吉日

